

第5章 小田柿進二の生物社会学

小田柿進二は、今西と違って、自分のフィールドを自らの業務（長崎税関や東京税関での検査業務、北海道斜里町の三井農林農場での労務、農業高校での教職）や身のまわりに求めるのみで、研究業務に着いたことがあるわけでもなければ、今西のようないわゆる探検的側面が見られるわけでもない。一見したところでは、単なる「市井の生物学者」（坂本，2007年）にすぎない。しかしながら、エベレストが登頂されて以降、もはや物理的な自然界に探検の場を求めることができなくなった現代に、真の探検を、しかも生涯にわたって完全に単独で実践し続けたという意味で、小田柿は、まさしく先駆的な探検的科学家と言える。

小田柿進二の観察眼

日常生活の中での観察

小田柿が観察の対象にしたのは、ほとんどが、実際には誰でも目にしていながら、その重要性に気づかない現象であった。それらは、多くの者が経験的に承知しているにもかかわらず、その現象について真剣に考えることがないため、単に目に入るだけで終わってしまっているのである。

1922年から東北帝国大学で初代植物学教授を務めていたハンス・モーリッシュ^[註1]は、イチヨウの分布のしかたに関心を抱いた。植物地理学的な意味での分布であれば、日本全土ということになるが、では、どこにでも生育しているかと言えば、そうではない。「一つの種は〔中略〕分布地域内に一様に分布しているのではない。それは、その生活の場の見いだされるところにだけ、分布し

[註1] モーリッシュは、1856年にオーストリアのブリュン（現チェコのブルノ）で生まれた。自宅果樹園の隣は、エンドウマメの遺伝実験で有名な、ダーウィンの救世主とも言うべきグレゴール・メンデルの修道院であった。そのためモーリッシュ家は、メンデルと親交が深く、ハンスもメンデルの薫陶を受けている（渋谷，1979年，29-40ページ）。メンデルの業績は1900年に再発見され、絶大な評価を与えられるわけであるが、モーリッシュは、その様子を目の当たりにするという光栄に浴している。

ている」(今西, 1949年, 104ページ)と主張する今西の縮尺度論を使って表現すれば、イチョウは、大梯尺的には日本全土に分布しているが、小梯尺的には、その分布は庭園、公園、並木道、寺社の境内などに限られるということになる。しかも、それらは植栽されたものばかりであり、野山には1本たりとも自生していないのである。モーリッシュは、この現象について次のように述べる。

大昔の地質時代には、この木はたいへん広範囲に分布していたのであり、化石もひんぱんに発見されているのだから、植樹しか見あたらないというのは奇妙である。

私は日本国中ずいぶん歩きまわったが、森の中で銀杏〔イチョウ〕に出会ったことは一度もなかった。しかし、この木が果実を大量に実らせることを考えると、これはいつそう奇妙なことに思われる。秋になると雌銀杏の木の下は、黄色い実でいっぱいになるのだから、発芽の可能性はきわめて高いといえる。なるほど日本では、実を大量に集めて炒って食べる習慣があるが、それでも多くの実はカラスや他の動物たちによってよそに運ばれる。それなのにどうして、野生の銀杏の木が見つからないのだろうか。(モーリッシュ, 2003年, 345ページ)

モーリッシュほどの植物学の泰斗にとっても、この分布様式は謎なのである。イチョウは、ヨーロッパでも、17世紀末に日本から輸入され(クレイン, 2014年, 42ページ)、公園や庭園などに植栽されているが、野生化はしていない。わが国では渡来して既に700年(堀, 2003年)から1000年(長田, 2014年b, 342ページ)という長年月が経過しているにもかかわらず、外来の植物で問題となる、そこここに繁茂するという状態には、未だになっていないのである。

モーリッシュは、発芽する前にネズミなどの小動物が種子(つまり、銀杏)を食べ尽くしてしまうためなのではないかと考えた(モーリッシュ, 2003年, 345ページ)。しかしながら、実際問題として、小動物がドングリなどの堅果類を食べ尽くすことなどありえないことを考えると、それでは野生化したイチョウが1本たりとも存在しないことの説明にはならない。帰国後、ウィーン大学総長に就任したモーリッシュは、1937年にアレロパシー *Allelopathie* という概念を提唱する。これは、異種の植物同士が遠隔的に影響を及ぼし合う現象を指す言葉で、わが国では他感作用と訳される(沼田, 1977年, 412ページ)。そこ

には、化学物質の介在が想定されている。しかしながら、この概念を用いても、イチヨウが植栽されたものしか存在しない事実を説明することはできない。

イチヨウの実は発芽しやすいことが知られているにもかかわらず、また、イチヨウを作物として畑で栽培することも昔から行なわれて来たにもかかわらず、原産地である中国南部の限局された地域（クレイン、2014年、21ページ）を除いては、野生状態のイチヨウを見ることはできない。現在、世界各地に植栽されているイチヨウは、ほとんどがわが国を通じて広まったものなのである。

ところで、モーリッシュは、外来植物が野生化するかどうかという問題と、その植物が森の中に自生するかどうかという問題を、明確には区別していないように見える。この場合の野生化とは、人間の管理を逃れ、植物自体の力で生育、繁殖するという意味である。両者は質的に全く異なる事象なので、その区別はきわめて重要である。やはり外来植物であるニセアカシアと比較すると、その違いははっきりする。

ニセアカシアがわが国に導入されたのは1873年なので、イチヨウと比べるとはるかに新しい。にもかかわらず、ニセアカシアは、川原や海岸などに広く自生するようになっていて、生態系を脅かす侵略的外来種と位置づけられているのである。同じ外来種といっても、両者のありかたは全く異なっている。やはりわが国への渡来年代が古いらしいキリは、イチヨウとは違って、質的にはニセアカシアと似通った分布様式を示す。したがって、その違いを説明する必要がある。とはいえ、林や森の中に入り込むことがないという点では、両者は完全に共通している。後ほど詳しく説明するが、これは1958年にチャールズ・エルトンが“生態的抵抗 ecological resistance”と呼んだ現象（Elton, 1958, p. 117）であって、事実としては、植物生態学の中で知られている（エルトン、1971年、148-149ページ）し、世界的に著名な植物生態学者である宮脇昭も、「外国から入ってくる新しい帰化植物は、その土地本来の、自然植生の発達している自然林内への侵入は不可能」とまで断じている（宮脇、1970年、184ページ）。

モーリッシュは、「植物というのはどれもみな（同じことは動物にもあてはまるが）、人間が育てるとやがて多かれ少なかれ変異しはじめる」という事実も

[註2] ただし、九州の一部には、野生状態のものが存在すると言われる（浅井、1993年、114ページ）し、それらしき写真もあるが、人間が植栽したものがそのまま残っているのか、それともいわゆる野生化したものかのかはわからない。

認めている (モーリッシュ, 2003 年, 332 ページ)。これは、先述のように、既にダーウィンが『種の起原』の冒頭で明記している、昔から知られてきた観察事実である。こうした現象は、その後も観察が重ねられているが、科学的な根拠に基づく説明がされているわけではない。たとえば、「野生状態では必要とされずに隠されてきた能力が、飼育状態にある動物にはしばしば発現する」(Hurford, 2011, p. 482. 傍点 = 引用者) という解説はあるが、それにしても、言葉だけの解釈を与えることですませているのである。小田柿の生物学は、既存の知識を出発点にするのではなく、このような身近なところにある謎を謎と認識し、それに素直に注目するところから始まっている。

小田柿は、生物学を扱った著書としては、『文明のなかの生物社会』(1986 年, NHK ブックス) と、『開発の中の生物たち』(1988 年, 農文協) の 2 著を上梓している。^[註 3] これらの中で、小田柿は、今西の種社会生物学を具体的な形で大きく進展させたのである。

小田柿進二の経歴

ここで、小田柿進二の経歴を簡単に紹介しておく。神奈川県綾瀬市の市史文化財担当職員であった坂本直子による、妻からの聞き書き (坂本, 2007 年, 148-158 ページ) がなかったとしたら、小田柿の私的側面が広く知られることはおそらく永久になかったであろう。小田柿は、後に三井物産の取締役となった、実業界では今なお有名な小田柿捨次郎、^{さね} 衣夫妻の間にもうけられた 9 子の次男として、1910 年 6 月 6 日に、東京府芝高輪南町 (現、港区高輪 4 丁目) で生まれた。母親の衣は、東京海上保険株式会社の創立者であり、茶人でもあった益田克徳の娘で、克徳の兄は三井物産の初代社長であった。

1914 年に進二は、創設まもない私立森村学園の幼稚園 (南高輪幼稚園) に入園し、そのまま小学校 (南高輪尋常小学校) へ進学した。森村学園の小学校では科目ごとに担任が異なり、第 4 学年からは英国人教師による英語の授業もあった。1923 年、新設された東京府立第八中学校 (現、都立小山台高校) に第

[註 3] 他に、『石仏と私』(1984 年) という私家版の著書がある。これは、相模野の自宅周辺に散在する石仏に関心を寄せた小田柿が、その観察をもとにしてまとめたものである。この著書には、既存の知識にとらわれない小田柿特有の鋭い観察眼がいたるところに現われていて、非常に興味深い。

1期生として入学する。この年の9月、関東地方を巨大地震が襲った。高輪の自宅は損壊を免れたが、神奈川県高座郡藤沢町鶴沼の別荘は全壊した。

今西や小田柿の昆虫学の恩師となる湯浅八郎は、京都帝国大学に創設される農学部農林生物学昆虫学講座の初代教授に就任すべく、1922年に文部省の海外研究員として、それまで居住していたアメリカからドイツに留学していた。翌年の8月末にドイツでの研修が終わり、ベルリンからパリに向かう列車の中で、日本の関東地方で大地震が発生して、東京が壊滅状態になったという報道に接する（同志社大学アメリカ研究所、1977年、34ページ）。

府立八中を卒業した小田柿は、1年間の浪人生活の後、1928年に新潟高等学校（現、新潟大学）に入学するが、その直前の3月に父親を亡くしている。この境涯は、今西や同年に生まれた、著名な文芸評論家であった小林秀雄の場合とよく似ている。今西は京都帝国大学入学直前に、小林は第一高等学校入学直前に、いずれも父親を亡くしているのである。

1931年、京都帝国大学農学部農林生物学科に入学した小田柿は、教授の湯浅や川村多実二（図5-1参照）と、さらには大学院生の今西と出会う。3学年上には岩田久二雄、1学年上には可見藤吉が、同級には森下正明がいた（後の個体群生態学者、内田俊郎は1学年下になる。次ページの図5-2参照）。大学では、

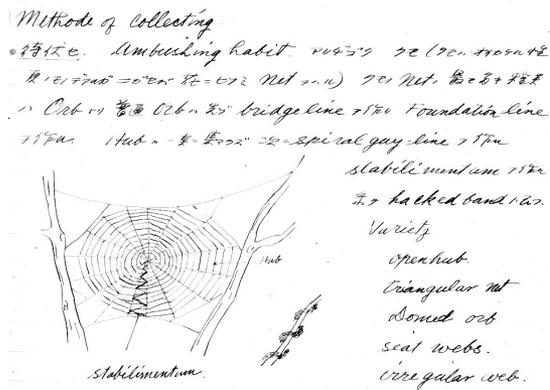


図5-1 川村多実二教授の動物生態学講義の小田柿進二によるノートから。小田柿秋津氏のご好意による。

上賀茂の深泥池をフィールドにして、羽化の様子を撮影しながら、ムカシトンボの研究（徳永、小田柿、1939年）^{〔註4〕}をしていた。1935年に卒業すると、同学部農林生物学科昆虫学教室の副手となる。

〔註4〕 1939年に日本語で発表したムカシトンボに関するこの共著論文（徳永、小田柿、1939）は、最近、ラトガース大学の昆虫学者によって引用されている（Carle, 2012）。

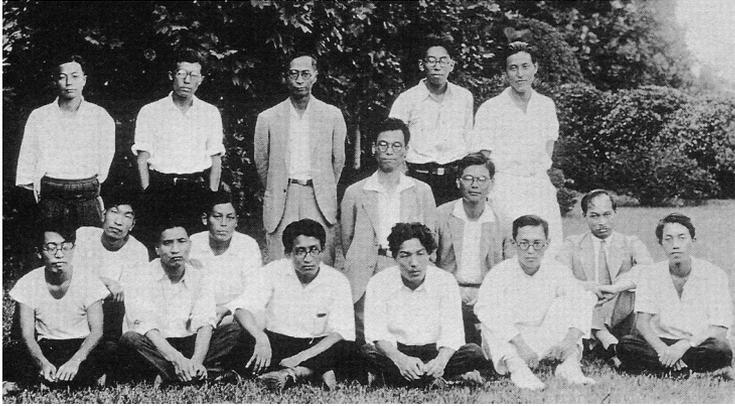


図5-2 京都帝国大学農学部昆虫学研究室の前で、1934年夏撮影。後列右端が今西錦司、その左が小田柿進二、中央が湯浅八郎教授。中列左端が内田俊郎、前列左端が渋谷寿夫、3人目が岩田久二雄、4人目が可児藤吉、右端が森下正明。谷田、1992年、49ページより転載。

1936年3月に、無給の副手のまま、20歳の初枝と結婚する。早稲田大学を卒業して三井物産に勤務していた高木真木彦の長女であった。初枝は、小学校が小田柿と同じ森村学園で、小田柿が6年生に進級する時に入学してきたが、小田柿は、その頃の初枝を記憶していたという。

まもなく、師事していた教授（湯浅八郎）がアメリカに留学するため大学を離れること^[註5]から、小田柿は外部に職を求め、同年10月に、長崎港税関検査課に植物検査員として就職するのである。輸出入される植物の害虫や病気を検査する仕事であった。当時は、たとえばクリスマス用として、久留米からアメリカにユリの球根を輸出していたが、それを視認によりひとつずつチェックしていたという（図5-3参照）。1939年に長男の秋津が生まれ、その後、小田柿夫妻は1948年までに、長男を含めて5子をもうけることになる。

1937年7月、北京で盧溝橋事件が勃発し、日中戦争に発展する。次第に戦時色が濃くなった1940年4月、東京芝浦の東京港税関に転勤となる。ここでも、輸入植物の検疫に従事するのである。今西は、翌41年4月に『生物の世

[註5] 湯浅は、1935年4月に同志社大学総長に転任していたが、その後も1年間だけ、講師として講義を続けていた（内田、1995年）。湯浅はこの時に留学しているわけではないが、初枝の証言は、湯浅が講師をやめた時点を指しているのではないかと思われる。

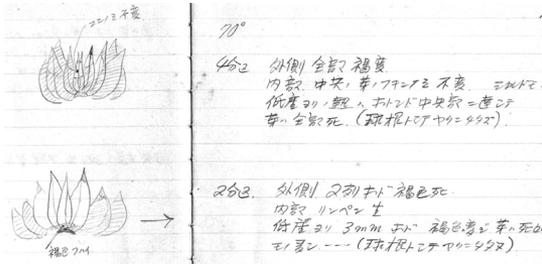


図5-3 小田柿進二の実験ノート。内容からすると、長崎時代の1938年前後のものではないかと思われる。小田柿秋津氏のご好意による。



図5-4 長崎時代の1938年前後のものではないかと思われる。小田柿秋津氏のご好意による。

界』を京都の弘文堂書店から遺書として出版し、7月には森下正明を副隊長として川喜田や梅棹ら8名の学生たちを引き連れ、わが国の委任統治領であったミクロネシアのポナペ島へ出発する。前年に結成された京都探検地理学会の最初の調査行であった。この時の経験が、翌年の大興安嶺縦断探検に生かされるのである。

調査を終え、帰国してまもない12月に、わが国を疲憊の極に陥れることになる太平洋戦争が起ころ。小田柿家には、その前後に次男と三男が生まれている。小田柿は、

国家公務員のためか召集されなかったが、大学院生であった可児藤吉は1943年に召集され、翌年7月にサイパン島で戦死する。^[註6]

1943年4月、小田柿は税関を退職して三井農林株式会社に就職するが、本社での事務的な仕事を嫌い、現場での労務を希望した。南方の自然をわが眼で見たいという思いがあり、ニューギニアかサイパンの支社の勤務を望んだとい

[註6] 京都帝国大学の動・植物学教室に関係して動植物の絵を描いていた牧野四子吉の妻、文字は、1942、3年頃の夏、夫とともに、可児藤吉、小田柿の同級であった森下正明、講師であった徳田御稔と御岳山に登っているが、その山行の詳細な記録を『山の旅』(1982年、アディン書房)に載せている。この中には、四子吉による可児のスケッチがある。当時の可児は、御岳山から流れ出る王滝川で水棲昆虫の調査をしていた。牧野のこの著書には、可児の戦死およびその後についても、当時の日記に基づいて記されている。